

コリント人への手紙第二6章1-2節 「恵みは無駄にしない」

1A 恵みによる救い 1

1B 神の和解

2B 罪の責め

3B 損なわれた平和

2A 恵みによる成長 1

1B 恵みに留まる努力

2B 主が結ばせる実

3A 今が救いの時 2

1B 慰めの時代

2B 開かれた心に注がれる恵み

本文

コリント人への手紙第二 6 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが第二コリント 5 章まで来ました。今朝は、6 章の初めの 2 節、1-2 節を見ていきたいと思います。6 章全体は、来週の礼拝で取り組みます。「¹ 私たちは神とともに働く者として、あなたがたに勧めます。神の恵みは無駄に受けないようにしてください。² 神は言われます。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける。」見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。」

1A 恵みによる救い 1

今日の説教題は、1 節に出てくる「神の恵みは無駄にしない」であります。私たちは、せっかく受け取った貴重なものを、無駄にしてしまうことがありますね。例えば、ある人から、とても高価な食べ物を贈り物で受け取ったとします。ところが、冷蔵庫の片隅に入れたまま、数か月が経ちました。冷蔵庫が何か臭いなどと思ったら、その生ものがすっかり腐っていたというようなことです。パウロは、エペソ人への手紙で、「2:8 この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。」とっています。恵みのゆえに、信仰によって救われました。この貴い、神の賜物を台無しにしてしまうことが、ここで言っている「**神の恵みは無駄に受け**」るということです。

パウロは、コリントの人たちにキリストを宣べ伝え、彼らがキリストを信じて、神の恵みによって救われました。けれども今、偽使徒たちの惑わしがあり、彼らの一部がパウロに対して強い疑いを抱いています。その信頼回復のためにパウロは、神に立てられた使徒であることを弁明しています。けれども、それは自分自身のためではなく、彼らのためなのです。彼らが、神の恵みによって救われたのに、考えなくてよいことまでも考えてパウロを悪く思ったり、心を閉ざしたりしていました。そ

うした中で、せつかく神の恵みによって、信仰によって救われたのに、その恵みが分からなくなっていったんですね。神の恵みによって救われることだけでなく、その恵みにとどまっていることが、もっと大事なことになるのかもしれない。

しばしば、日本ではこんな言い回しがあります。「日本のクリスチャンの信仰平均寿命は3年。」これはどこから来たのか調べた方の記事がありますが、たった一つの教会の統計なのだそうです。洗礼を受けてから、平均 2.8 年で教会を去るということです。¹たった一つの教会の統計ですから、全く日本全体の教会の平均ではないのですが、けれども、信じてバプテスマを受けることが、必ずしもその恵みに留まっていることとは限らないことを物語っていると思います。神の恵みによって救われるのですが、もっと大事なのは、その恵みに留まっているかどうか？なのです。

1B 神の和解

この箇所は、前回の学びの続きです。パウロは、自分たちがキリストの使節であって、彼らに懇願していました。和解を受け入れなさいという願いです。「5:18-19 神は、キリストによって私たちをご自分と和解させ、また、和解の務めを私たちに与えてくださいました。すなわち、神はキリストにあって、この世をご自分と和解させ、背きの責任を人々に負わせず、和解のこぼれを私たちに委ねられました。」私たち人間は、神が何か自分に対して怒っていると思ってしまう。自分たちに何か瑕疵、過ちがあって、自分たちが何とかしないと罰を与える存在だと思っています。それで、聖書の神、またキリストについても、自分が行いを改めて、きちんとしないと神は怒って、罰すると思ってしまうのです。それでパウロは、いや、すでに神は和解してくださっているのだ、と話したのです。神はキリストにあって、ご自身にその背きの罪を負わせたのです。問題は、自分たちが心を閉ざしてしまって、それを受け入れないということであります。主は、ご自身を傷つけてまで、わたしのところに来なさいと呼びかけておられるのに、恐れによって、行こうとしないという問題があるのです。それでパウロは、「**和解をさせていただきなさい。(5:20)**」とお願いしたのです。

2B 罪の責め

主の心はとても広いです。そして、キリストの使節であるパウロたちの心も、広がっています。主の心がどれほど広いのかは、例えば、イエス様が喩えとして語られた、五時からの男たちの話にも出てきます。日雇い労働者を、主人が、市場で探しました。午前 9 時から彼らを雇いました。そして、正午ごろにまた新たに、突っ立っている男たちを雇いました。そして、午後 5 時ごろに、まだ立っている者たちがいました。彼は、自分のぶどう園で働かせます。午後 6 時で終わります。それで、賃金を最後の来た者から支払っていったのです。しかも、5 時から働いた男たちの賃金は、午前 9 時から働いた者たちの賃金1デナリと同じだったのです。それで不満を漏らしたのですが、主人は、約束どおりの賃金ではないか？そして、こうも言いました。「**マタイ 20:15 それとも、私が気がいいので、あなたはねたんでいるのですか。**」神が、最後の最後に残っている人々を救わ

¹ <https://www.revival.co.jp/rj/legwork-diary/2009/10/post-19.php>

りたいと願われており、そして、恵みを十二分に分け与えたいと願われているのです。これほど、心の広い方です。

ところが、コリントの人々は、混乱の中に陥っていたのだと思います。パウロによって、恵みの福音を聞いて、信じた。けれども、いろいろな肉の問題がありました。まだキリストにあつて幼い者たちでした。そこに、偽の教師たちがやって来て、これこれを行うことによってあなたがたは、立派なキリスト者になれると教えました。けれども、そういった律法主義が入り込むと、必ずや起こるのは、罪責感です。自分はその通りになれるのですから。そうやっているつもりでも、実体が伴いませんから。けれども、問題は、自分たちがそうやって罪意識を自分で抱えていることさえが見えなくなっています。律法主義的になっている人たちは、自分ではない他の人たちが悪いと言います。自分を責めるのを回避したいので、他の人たちをやり玉に挙げるのです。その対象が大抵、弱い人であったり、逆に権威のあるような人であったりするのです。なので、パウロはやり玉にあげやすいのです。権威があり、そして愛がありました。父のような存在です。自分の心が狭まっているのに、パウロやテモテが何か強圧的に自分たちを支配しようとしていると思込んでいます。

3B 損なわれた平和

その結果、平和が損なわれます。自分の心の中に平安がないし、人と人の間に平和がありません。疑心暗鬼になって、信頼関係を結ぶことができません。イエス様は、すべての壁を打ち壊した平和であられるのに、自分の方で壁を再び建て上げてしまっているのです。そうしたことで、パウロは、恵みを無駄に受けないでくださいとお願いしています。神の恵みを、信仰によって受けたのに、その実が結ばれないままにしていることはもったいなすぎるということを言っているのです。

2A 恵みによる成長 1

1B 恵みに留まる努力

ですから、私たちは、恵みを受けるだけでなく、恵みに留まる努力が必要です。主が、救ってくださったところにある愛、そこにある平安、喜びは、力を尽くして、心を尽くして保たないといけないものなのです。使徒の働きで、バルナバがアンティオキアに行ったら、異邦人が次々とイエスを信じている姿を目撃しました。「使 11:23 バルナバはそこに到着し、神の恵みを見て喜んだ。そして、心を堅く保っていつも主にとどまっているようにと、皆を励ました。」神の恵みがありました。そして、「心を堅く保っていつも主にとどまっているように」と励ましているのです。

ですから、私は、イエス様を信じた人には必ず、お話しすることがあります。三つのことです。一つは、祈りの生活を持つことです。もう一つは、聖書を開いて、みことばを聞く生活です。そしてもう一つは、交わること、教会として集うことです。時間のあるときに、であるとか、都合がいたら、であるとか、横に追いやるものではないのです。私たちの体を保つために、ご飯を食べることが、「時間のあるとき」であるとか、「都合がいたら」とかいうものではないですね？私たちが仕事をし

ている時に、「時間のあるとき」とか、「都合がいたら」というものでもありません。なおさらのこと、永遠のいのちという報いが与えられている恵み留まるのは、余暇ではなく、余暇とは正反対の死活的なものなのです、そして、留まるところに神がご自分の恵みを注がれます。

ペテロは、第二の手紙でこう言いました。「3:18 私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。」どうやって、恵みによって成長するのか？それは、この手紙の初めに書いています。「1:5-8 だからこそ、あなたがたはあらゆる熱意を傾けて、信仰には徳を、徳には知識を、6 知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、7 敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。8 これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、私たちの主イエス・キリストを知る点で、あなたがたが役に立たない者とか実を結ばない者になることはありません。」恵みに留まることによって、実を結ぶようになります。

2B 主が結ばせる実

私たちが、このような留まることをしている時に、主ご自身が実を結ばせてくださいます。それが分かるのは、イエス様が語られた、種蒔きの喩えです。道端、岩地、茨の生えた土、そして良い地であります。それらは、みことばの種がどのような心に落ちたのかを示すものであります。私たちが、祈り、みことばに取り組んでいる中で、主は、聖霊によって自分の心がどのようになっているのかを示してください。もしかしたら、表面的に御言葉を受け入れていて、心は堅いままかもしれません。それは岩地です。一時期、喜んだり、感情では反応しているのですが、深みがないので、ちょっとした試練や不都合なことがあると、すぐにあきらめてしまいます。あるいは、みことばが心の深みに入っているものの、自分が大切にしているものが心にあって、そのみことばの命令が、自分のしていることの邪魔になるかもしれません。それで、その雑草のようなものを取り除かないといけないのですが、それをしないままです。どんどん思い煩いや誘惑が出てきます。これが、茨の生えている土です。実を結ばないのです。

けれども、良い心でしっかりとみことばを保っていれば、つまり、みことばを聞いて、それをじっくりと生活の中で取り組んでいく時に、主ご自身が、三十倍、六十倍、百倍の実を結ばせてくださいます。ほんのわずかな、みことばの種でよいのです。主がそれを百倍の実にくださるのですから。私たちに求められていることは、そう多くはありません。心を良い土地のままにしていることです。けれども、それがなかなかできない。目の前に雑草が見えていても抜こうとしない。自分の心が堅い、岩地のようだと思っても、そのままにしている。そういったことで、御霊が働かれているのを拒んでしまうということがあるのです。そうであってははいけません。恵みを無駄に受けないようにする、ということはこういうことです。

3A 今が救いの時 2

それでは、パウロが次になんと言っているのか 2 節を見てみましょう。「**神は言われます。「恵み**

の時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける。」見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。」

1B 慰めの時代

この箇所は、イザヤ書 49 章 8 節からパウロは、引用しています。「【主】はこう言われる。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、わたしはあなたを助ける。わたしはあなたを見守り、あなたを民の契約とし、国を復興して、荒れ果てたゆずりの地を受け継がせる。」

パウロは、イエス様が来られた時から、イザヤの預言が次々と成就していったことを思っていたかもしれません。イザヤの預言の後半、40 章以降は、バビロンから帰還する約束を与え、「慰めよ」という呼びかけから始まるものです。「40:1-2 「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを【主】の手から受けている、と。」この幻が、キリストにあって成就していきます。キリストこそが、慰めを与えられる方であり、この方が、罪と咎を赦され、二倍のもので報いてくださるのです。その延長として、48 章 9 節の預言があります。恵みの時にわたしは答え、救いの日に、あなたを助けると。

つまり、キリストが来られた日以降、今に至るまで、恵みの日、救いの日なのです。みなさんが、イエスを自分の主、救い主として心に受け入れ、それで救われるという恵みの日なのです。このような慰めが広く、あまねく、信じる者に与えられている時代なのです、そういった恵みの時に、自分の心を窮屈にしているのは、もったいないのです。幼子のように、そのまま主のもとに行けばよいのです。主は、豊かに恵みを施してください。

2B 開かれた心に注がれる恵み

パウロは、「今は」と強調していますね。イザヤの預言は、紀元前 700 年ごろに与えられたものですが、パウロの時代に、キリストが来られた時に、この約束が今となったということです。そしてこれは、「だから今、受けとりなさい」という招きでもあります。「いつか、都合の良い時に考えるよ」ではないのです。すべてを捨てて、そのまま受け入れるからこそ、それが恵みなのです。都合の良い時であれば、そこに変わらない自分がいます。自分の都合で受け入れるのは、すでに神の恵みではありません。罪と咎を持っている自分が、そのまま主のところに行けば、主は豊かにあまりある赦しを与えてくださるのです。

イザヤは、言いました。「55:6-7 【主】を求めよ、お会いできる間に。呼び求めよ、近くにおられるうちに。7 悪しき者は自分の道を、不法者は自分のはかりごとを捨て去れ。【主】に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださいから。」主にお会いできる間、近くにおられるうちに、ということです。もし、ご自身の心に罪や悪があるならば、今、主に立ち

返るのです。何か自分が良くなってから、といたら恵みが台無しになってしまいます。恵みが恵みでなくなります。まるで、それは無償で与えているのに、「いや、お金がないから、後で来ます。」と言っているのと同じです。黙示録の終わりのところには、「**渴く者は来なさい。いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。**」とあります(22:17)。

一昨日、バイブルカフェに、手作りのキャロット・ケーキがあるという宣伝を見て、いらっしゃった方がいました。多栄子は、すぐに私に電話をよこし、お客さんが来たとの連絡をしてくれました。ところが、私が入口に着くと、なんと、その女性が帰ろうとしていたのです。聖書の話を書くという文がチラシにあったからです。多栄子は、「いいえ、聞かなくてもいいですよ」と言ったのに、「それでは、申しわけない」とのことで、帰りました。恵み、無償の食べ物を受け取れなかった姿です。

一方的な神の好意を、みなさんは受け取ってください。神の和解を受け入れてください。恵みを無駄にしないでください。恵みの内に留まりましょう。恵みが尽きることなく、心に注がれていくために、堅く立って、主にすがってください。